

導入牛のヨーネ病検査において判定が困難であった 1 事例について

中丹家畜保健衛生所

○山田 柚衣 杉浦 伸明

【はじめに】 府外からの導入牛におけるヨーネ病の導入時自主検査において、判定に苦慮する事例に遭遇したので概要を報告する。【検査及び結果】 ①導入時検査：導入牛 4 頭（ホルスタイン種）の糞便を用いたリアルタイム PCR 検査（定性・定量検査）を実施。1 頭（24 か月齢）において、ヨーネ菌遺伝子陽性判定、遺伝子量は判定基準（0.001pg/2.5 μ l 以上）未満（定性陽性・定量陰性）。なお、抗体検査は全頭陰性。②導入時再検査：同日、当該牛から改めて糞便を採取、再検査においても同様の判定。追加検査によるリアルタイム PCR 産物のサイズ確認（電気泳動）、標的部位の異なるリアルタイム PCR 検査（定性のみ判定可）においても陽性判定（定性陽性・定量陰性）。③隔離後再検査：府のヨーネ病防疫対策要領に基づき、当該牛の隔離飼育を継続の上、約 1 か月後に改めて採材、前述 2 種類のリアルタイム PCR 検査を実施し、いずれも陰性判定（定性陰性・定量陰性）。【対応】 隔離後再検査で陰性判定であったが、ヨーネ病の病態から当該牛がヨーネ菌を保有する可能性を否定できないと判断。畜主の意向もあり自主淘汰を実施。なお、自主淘汰時の病理検査では、ヨーネ病を疑う所見認めず。【考察】 家畜伝染病等において、迅速な診断のため遺伝子検査が多用される中、検査の特性上、今回のように判断に苦慮する事例に遭遇する可能性がある。的確な診断のためには、複数の検査による確認が必要。